

2. 寄稿:西田幾多郎と鈴木大拙の『生きる』智慧 (哲学を愛する鎌倉市民 伊藤紘一)

私は 1943 年大阪府豊中市に生まれ、京大冶金工学修士を修了した後、日本軽金属、経済産業省外郭組織、阪和興業に勤務。すべての勤務先で新規事業開発に特化してきた実績を活かすために、60 歳定年を機に、ベンチャー育成コンサル企業を立上げ 21 年間 81 歳まで経営してきました。尚、2013 年より、銀座の教文館の社外取締役です。

京都の下宿が西田幾多郎に因んだ“哲学の道”に近かったこともあり、幾多郎に興味を持ちました。明治 18 年生まれ之母方の祖母の影響もあり、15 歳の高校 1 年生のときに豊中教会で洗礼を受け、勤務地が東京であった 32 歳の時に良い説教をする牧師の教会を探した結果、鎌倉に家を構えて、鎌倉雪ノ下教会に転入し、今年で 51 年経ちました。

ご存じのとおり、西田幾多郎も第四高等学校時代からの親友の鈴木大拙も、“信仰”というものを深く理解し、哲学と宗教は根本的に共振すると確信しておられた！

大拙によれば、本来の人間性とは、自由であり、創造性であり、報酬を顧みないはたらきとその自足的なありかたでもある。その内実は自己と一体であり、関係しあう他者の苦悩からの解放を切に願い、止むにやまれぬ思い(祈り、願)から行為に出る自律的内発性である！



大拙から
見た幾多郎
彼を一言で評すると
「誠実」でつぎる。



西田幾多郎記念哲学館パンフより抜粋

幾多郎によれば、『善の研究』では「純粹経験」は自分の根底の問題であり、「実在」は哲学の始まりで、「善」は自己開花の道程、「宗教」は帰着点！

【世界がどう存在しているのかという認識と、人はどう生きるのかという人生観が交わったところに哲学の始まりがある。それは私たちを道德のみならず宗教の世界にまで導く。そのとき人は、考えられた真実ではなく、生きられ、体得され、体現される真実を強く望むようになる。】(若松英輔著の『NHK100 分 de 名著・善の研究』テキストより引用)

石川県西田幾多郎記念哲学館・館長の浅見洋氏はクリスチャンであり、金沢大学・大学院を経て、筑波大学で博士号を取得されましたが、その博士論文を書物にした『西田幾多郎とキリスト教の対話』(朝文社 2000 年発行)を基に、西田がキリスト教や仏教などの思想に如何なる影響を与えた

かを簡潔に述べる。

【滝沢克己】西田の勧めでドイツのボン大学 カール・バルトの元に留学する。西田とバルトの二人の師の教えを活かして、キリスト教をはじめ浄土真宗、真言宗、神道などを巻き込んだ比較思想的、“宗教哲学的対話”を展開させる基を創った。

【八木誠一】1957～59年、新約聖書学研究でドイツのゲッチンゲン大学留学中、禅の古典『碧巖録』を列車で読んでいたら突如、“禅的体験”に出会い、存在と思惟は同一である、言葉以前の“覚”があると確信した。西田哲学の“純粹経験”をした！

【その他の宗教間対話推進者たち】

(禅仏教) 秋月龍珉、久松真一、西谷啓治、阿部正雄、上田閑照

(キリスト教) 武藤一雄、本多正昭、中村悦也

【西田哲学との対話により自己の宗教思想を形成しつつある人たち】

(プロテスタント) 小田垣雅也、花岡永子、延原時行

(カトリック) 小野寺功、門脇佳吉

浅見館長は、筑波大学では、ヘーゲル研究者であった故中森肇教授に師事したが、ハイデルベルグ大学客員教授・小川圭治氏は浅見館長に1989年に文部省の外地研究員としてミュンヘン大学のパネンバーク教授のもとで学ぶ機会を与えた。

彼が外地研究員となり驚いたのは、日本のキリスト教とドイツのそれは全く異質で、“それぞれの国の思惟や心情に呼応した特殊でローカルな形態”をとるという事実であり、それを知ったのが最大の収穫であったとのこと。

江ノ電・稲村ヶ崎駅から徒歩で15分の姥ヶ谷に建てた西田の別荘、寸志荘という庵は、現在は学習院大学に寄贈。岡野浩、利津子両教授が管理と同時に、『善の研究』読書会も開催。鎌倉雪ノ下教会会員の斎藤壽代さんからのご紹介で私も参加させて戴いています。

【幾多郎のお孫さんの上田久著の『西田幾多郎の妻』1986年南窓社刊の引用】

大正14年1月幾多郎の妻の寿美さんが亡くなられた後の西田の状況に同情した友人、安倍能成、和辻哲郎、岩波茂雄らは再婚相手との“お見合い”を、寸志荘の近くの津田塾別荘で行い、昭和6年目出度く再婚！琴さんは津田塾大学の星野学長の片腕の英語教師で、来日したヘレンケラーや詩人タゴールの通訳もする。

会長を務める湘南YWCAが鎌倉雪ノ下教会の一室を借りることに伴いこの教会の教会員となる。私がこの教会に転入する数年前にお亡くなりになるまでの12年間、鎌倉の婦人子供会館など湘南地区の社会貢献に邁進されつつ、幾多郎の学者生活に潤いを与え、クリスチャンではあっても東慶寺の幾多郎の墓に入られたのでした！

補：本寄稿のバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/professional> に掲載